

2012.9.7

(昭和43年7月23日第3種郵便物認可)

(3)

教室創設九十周年の節目を迎えた北大腫瘍病理学分野(第二病理)脈々と流れる伝統を受け継ぎつつ、寄付講座「探索病理学講座」と車の両輪のように運動しながら、がんの治療法開発に力を注ぎ、病理医の育成を目標に挙げる。

北大医学部には、病を指し、「トランスレーショナル・パソロジー」を展開する。分子病理学分野(第一病理)は「実験(基礎)病理学」の色彩が

トランスレーショナル・パソロジー展開

がん治療法開発、専門医育成

強いのに対し、腫瘍病理学分野は「人体(臨床)病理学」を重視してきた。

医学の進歩や歴代教授によって教室は進化。恩師の長島和郎前教授を引き継いで、准教授から平成二十年に就任した田中伸哉・五代教授は、基礎研究の成果をすぐに臨床へフィードバックすること

年間千例を超える外科病理診断に加え、剖検は他病院からの依頼を含め年間八十例に達する。これら病理学の基本を積み重ね、創薬や新しい治療法につなげていく。

伝統的に追究してきた脳腫瘍研究は、全国求めた結果、胃、大腸

教室探訪

北大第2病理



教室員は、教授をはじめ若くて活気あふれる

乳、肺、脾の臓器がんで臨床応用が見えつつある。シグナル伝達分子CRKを標的に、がんの分子標的療法も推進。働きを阻害してあらゆる臓器で悪性を抑える「がんの万能薬」開発を思い描く。一方、寄付講座が二十一年度開設し、二十三年度からの分野再編でスタッフが拡充。大学院生十八人(臨床からの出向八人)は学内の基礎講座で最も多く、技術補助員や秘書などを含めると四十人近い大所帯だ。同門会員は百五十人、物故会員を含めると二百人を超える。同門の医師が診断病理部門トップを務める医療機関は道内九病院。それとは別に、稚内や帯広の病院に対し、教室から応援医を定期的に送り、本道の医療の質向上に寄与している。本道の病理専門医は百人程度と言われ、中年者が多く占める中、次世代を担う若手病理医の育成・輩出が急務となっており、研究者と病理医の双方を育成するスタンスは今後も変わらない。十一月下旬に創立九十周年の記念式典や記念誌発刊も計画しており、さらなる飛躍が期待される。



歴代教授の伝統を継承しつつ、臨床と密接に関わるという、実学重視のスタンスで教室運営している。

方針に掲げる「トランスレーショナル・パソロジー」と聞くと、臨床も基礎研究も表面的にしか取り組まな

田中伸哉教授インタビュー

イメージがあるかも知れないが、両方とも深く知らなければ、絶対に良い仕事はできない。そういう意味で臨床も基礎研究もどちらも学べる教室をアピールし、大学院生は毎年コンスタントに入ってくる。

同じ病理学を追究している分子病理学分野(第一病理)、病院病理部、医学部保健学科、歯学部教員とも協力体制を結び、互いに

臨床と基礎 両方を追究

研さんを積んでおり、医学部の医学科、保健学科、歯学部の学生も教室に入ります。みな若くて活気あふれる中、研究だけにとどまらず、教室旅行、クリスマス会などイベントも活発。日本人の仕事の流儀は、とかく歯を食いしばってがむしやりに前進するケースが目立つが、仕事もプライベートも楽しむ余裕を持ちつつ、一流の成果を上げたい。